



**University of
Zurich**^{UZH}

**Zurich Open Repository and
Archive**

University of Zurich
University Library
Strickhofstrasse 39
CH-8057 Zurich
www.zora.uzh.ch

Year: 2019

Kujira no reiko no tame no matsuri

Holm, Fynn

Other titles:

Posted at the Zurich Open Repository and Archive, University of Zurich

ZORA URL: <https://doi.org/10.5167/uzh-179169>

Journal Article

Published Version

Originally published at:

Holm, Fynn (2019). Kujira no reiko no tame no matsuri. *Nicchūkan Shūeniki no Shūkyō Bunka*, 5:41-46.

日中韓周縁域の宗教文化Ⅴ（2019年3月25日）別刷

ケジラの靈魂のための祭り

フィン・ホルム
翻訳：加藤 幸治

クジラの霊魂のための祭り

フィン・ホルム*

翻訳：加藤 幸治

はじめに

一九〇六年、西日本の捕鯨会社はノルウェー式捕鯨を鮎川にもたらした。そこからおよそ五〇年後、第一回鮎川鯨まつりが鮎川で開催された。一九五三年八月二二日から二五日のことであった。祭りは盛会のうちに終わり、翌年から恒例行事となって毎年いくつもの新しい出しものが加えられていったが、この祭りが本来持っていた意味は今日ほとんど忘れ去られている。一九五三年の河北新報の記事によれば、捕鯨会社はそれまでに4万頭のクジラを捕獲してきたので、鯨まつりはその死んだクジラの鯨供養を実施するために企画されたものであった（註1）。

この論考では、鮎川の捕鯨とまちの歴史における鯨供養の宗教的、政治的背景について検討したい。筆者は、当時の鮎川は捕鯨の町としての知名度を上げるために、もともと西日本で行われてきた鯨供養と祭りの伝統を導入することが不可欠であったのではないかと考えているのである。

クジラの鎮魂のゆくえ

鯨供養の意味を理解するために、まず牡鹿鯨まつりの来歴から見てみよう。『牡鹿町史』によれば、第一回鮎川鯨まつりは、町の発展とクジラの霊魂や海難者の霊を慰めることを目的として、鮎川町役場の協力のもと、地元の消防団、青年団、婦人会が中心となって企画されたと記している。同書で加えて、その祭りでは盆踊り大会や大漁唄い込み、一万頭の死んだクジラの霊魂のための万霊供養施餓鬼流燈、いわゆる燈籠流しが催されたとしている。このことによって、当初の鮎川鯨まつりには少なくとも三つの宗教的な目的があったことがわかる。捕獲されたクジラの鎮魂、捕鯨船の海難殉職者たちの鎮魂、そして豊漁祈願である。



写真1 鮎川・観音寺での鯨供養祭（2014年、加藤幸治ゼミナール撮影）

*チューリッヒ大学アジア・オリエント学研究所 ティーチング・リサーチ・アシスタント

クジラの鎮魂について考えるとき、仏教的な文脈において理解しなければならない。動物は、人間と同じように、死後にその霊魂が仏となって極楽へ行くことができ、再びこの世に生を受けられると考えられてきた。しかし、暴力的に捕獲された場合、そのクジラは成仏できずに餓鬼としてさまよい、業を背負って輪廻転生を繰り返すと考えられた。

そのことをよく表現しているのが、梶野恵三が一九五五年に刊行した小説『海の野獣』である。この小説のなかで、鮎川の捕鯨船員は四頭のマッコウクジラを捕獲し、彼らのキャッチャーボートに鎖で牽引する場面がある。そのときマッコウクジラの一頭はまだ息があった。クジラは小さな眼で捕鯨船員らに憎しみのまなざしを向けているが、船員のひとは主人公を次のように納得させようとする。

なあに、あの鯨が恨んでるのはお前達なもんか。船長だよ。船長はお前、砲手になってから今迄に千五百頭も殺してゐるってんだ。千五百頭の鯨の恨みは、船長の一身に集まってるんだからね。
(註3)

その後主人公は、鮎川の難破船の記念碑を訪れる。そこで捕鯨船員のひとりが、何十年か前に捕鯨会社の東洋捕鯨の船が金華山沖で遭難し、一三人の船員が再び戻ることはなかったのだと説明した。多くの鮎川の人々は、マッコウクジラのせいだと信じていた(註4)。

梶野の小説によると、捕鯨者らはクジラを狩るために彼らを憤慨させ、そのために船を攻撃することもあると信じていた。この憤りは、死をも超越することさえあり得るとされ、その怒れる魂は、この物語の船長のような人物や、さらに村全体にさえ不吉なことをもたらすことができると信じられていた。そのような呪いに対抗し、さらに他の生き物を殺すことの罪悪感を和らげるため、クジラの供養塔の建設と鯨供養祭の開催が必要だったのである。

これらは小説における描写であるが、こうした鎮魂のための営みを、鮎川の観音寺に所在する「千



写真2 東洋捕鯨株式会社が1926(大正15)年に建立した記念碑



写真3 東洋捕鯨株式会社が1934(昭和9)年に建立した記念碑

頭鯨霊供養塔 昭和八年十月建之 施主鮎川捕鯨会社」と刻まれた一九三三年建立の鯨供養碑や、「鯨霊魚霊供養塔」と記された鯨位牌にも見出すことができる。どちらも捕獲したクジラの霊魂を鎮めるための仏教的な儀式を示しています。この寺院の僧侶たちは、毎日この鯨位牌に供物を献じて経をあげることで、さまよえるクジラの霊魂を慰め、あの世への道筋を示している。年に一度、お盆の時期、そしてこの時期に行われる牡鹿鯨まつりでは、ウミセガキ（海施餓鬼）と呼ばれる儀式において鯨位牌は鯨類や魚類が命を落とした海へと運ばれる。そしてクジラの霊魂は、海の彼方にへと送られることで、再び生まれ変わるか極楽に至ることができる。

同様の儀礼は、海難事故で命を落とした漁師や捕鯨船員らに対しても行われる。現在、鮎川の観音寺には、一九二六年の「哀悼碑」と一九三四年の「記念碑」に東洋捕鯨株式会社によって建立された遭難した捕鯨船の乗組員に対する二つの記念碑がある。儀礼と記念碑は、鮎川の捕鯨者がクジラの命を奪うことへの罪悪感を和らげたいと望むことでなく、恵みへの感謝と、海で命を落とした人間に対して行うのと同じようにクジラに対しても宗教的な意味をもって扱っていたことを示している（註5）。

鯨供養の原形

興味深いのは、これらすべての記念碑は一九〇六年にノルウェー式捕鯨が鮎川にもたらされてから、長い時間を経てから建立されていることである。実のところ、西日本の伝統ある捕鯨基地においては、鮎川のそれと似たようなクジラの記念碑や位牌が存在するが、三陸沿岸の他の地域ではそれらを見出すことはできない。

例えば、江戸時代のクジラの記念碑は、三重県や佐賀県、長崎県に存在し、最古の例は一六九二年に北松浦（現平戸市）に建立されたものである（註6）。最も大きなものは、山口県長門市の通浦にある向岸寺の高さ七七センチメートルのクジラの位牌である。この位牌は一六九三年のもので、鮎川にある位牌の二倍の高さがある。その碑文によると、それは母クジラを捕獲したときに殺してしまったクジラの胎児に捧げられたものだとわかる。西日本の民話には、子クジラを殺された母クジラの怒りによる呪いについて伝えている。この呪いへの対処のために行われるのが鯨供養であった。向岸寺では一六九二年以来、その年の捕鯨シーズンの終わりに、毎年、鯨供養祭が毎年行われてきました。すべてのクジラには戒名が付けられ、四冊の過去帳にその名が記されてきたが、一冊だけ現存してい



写真4 唐桑半島の鯨塚（2009年、加藤幸治撮影）



写真5 洋野町（旧種子町）の鯨洲神社（2013年、加藤幸治撮影）

る過去帳は一八〇二～一八四二年のもので二四三頭のクジラについて記されている。西日本の多くの捕鯨地域では、クジラの過去帳は盆行事のなかで鯨供養祭が催行され、この伝統が今日の鯨供養祭へとつながっている（註7）。

これに対し、三陸沿岸ではどうであろうか。興味深いことに、江戸時代のクジラの記念碑はいくつか三陸沿岸にも存在するが、それらは著しく西日本のものとは異なっている。三陸沿岸のクジラの記念碑の多くは鯨塚と呼ばれ、自然石（もしくは自然石とその傍らの石碑）であり、人間が加工して製作するものではない。

網地島のクジラの墓標には「奉請右鯨大明神」と記されている。これがいつ建てられたかは不明であるが、クジラの座礁に関連していると考えられている。これと似た石碑が、気仙沼に近い唐桑半島の御崎神社に祀られている。ここの鯨塚は一八一〇～一八三五年の間に、浜に打ち上げられたクジラのために建立された。さらに、一八七五年には気仙沼でクジラが座礁し、その利益から地域の人々は地元の八幡神社の階段を修復し、貧しい家庭に米を提供することができたという。地域の人々は、御崎神社にクジラの墓標を建てることで、クジラに感謝を示したのである。似た例としては、一八一八年に八戸藩で一八頭ものクジラが座礁し、角の浜の人々はこの地域に幸運をもたらしてくれたクジラに感謝するために鯨洲神社を建てた（註8）。八戸藩は、金華山から弁財天を分霊して祀ることで神社の設置を許可し、村の名前を角の浜から鯨洲村と改めさせたのである。

これらの例から分かるように、三陸沿岸の人々は江戸時代にクジラを殺した罪を贖うためにクジラの記念碑を建てたのではなく、むしろそれらの座礁に感謝するため建立してきた。人々は、クジラが人間が繁栄することができるようにその命を犠牲にしたと信じ、そしてクジラの墓標や記念碑は彼らに授けられた贈り物に対する返礼の象徴であった。多くのクジラにまつわる口頭伝承では、クジラはエビスと結びついていると信じられ、彼らの命を犠牲にするだけでなく、人びとに豊漁をもたらす存在として描かれてきた。これは民謡やクジラの豊漁を求める芸能においても見られる考え方である。

鯨供養祭の背景にある政治的側面

さて、話を牡鹿鯨祭りと観音寺での鯨供養祭に戻そう。これまでみてきたように、鯨供養は西日本の捕鯨地域の習俗であり、近代捕鯨がもたらされる以前の三陸沿岸のそれとは著しく違ったものであった。今日の鯨供養やそれにまつわる祭りが、西日本からの「移植された伝統」であることを意味しているのであるか。ここまで筆者は、鯨供養祭の宗教的な重要性について述べてきたが、その政治的な側面について考えることで、現実はいくらか複雑であることがみえてくる。

鮎川の観音寺にある二つの記念碑は、遭難した捕鯨船員に捧げられたもので、当時の鮎川でもっとも大きくまた影響力のあった捕鯨会社で、下関から進出した東洋捕鯨株式会社によって建立されたものである。一方、一九三三年の記念碑は、地元住民が所有する最初の、そして当時の唯一の捕鯨会社であった鮎川捕鯨によって建てられた。この鮎川の捕鯨の黎明期、ほとんどの捕鯨関連の労働者は西日本の捕鯨会社か朝鮮の捕鯨地で雇われた人々か、ノルウェー人の捕鯨の専門職であった。地元で雇われて捕鯨船に乗る人はまだ少なかったが、いくらかの人々は捕鯨の事業所で簡単な仕事に従事したり、補助的ではあるが独立した鯨肥工場で働いたりしていた。

実際、鮎川捕鯨は一九二七年に地元の肥料生産者によって設立された。当時の新聞報道によると、とくに関西の捕鯨会社は鮎川捕鯨の設立に強く反対し、その会社が成功するのを妨げるためにできる限りのことをしたことがわかる。例えば、一九二七年一〇月二六日付の河北新報（六頁）によると、同社はマッコウクジラ以外のクジラ種を狩ることを許可されておらず、クジラの肉を売る許可も与え

られず、すべてをより収益性の低い鯨肥にすることを余儀なくされた。

この文脈において、一九三三年のクジラの記念碑が鮎川捕鯨によって建てられたことがなぜ重要であるかを理解することができよう。すなわち地元資本の鮎川捕鯨は、この記念碑によって、他の企業からの絶え間ない圧力や、大恐慌による困難な金融環境、そして一九三三年の三陸津波にもかかわらず、一〇〇〇以上のクジラを捕獲することに成功したことを、町の人々や他の捕鯨企業に示したのである。筆者は、三陸沿岸の伝統的なクジラの墓石や記念碑とは違い、西日本風の石碑を建てることで、近代的な捕鯨技術を習得しただけでなく、西日本の捕鯨文化にも適応することで、鮎川捕鯨が他の捕鯨会社と同格であると知らしめようとしたと考える。

一九五三年にはじまった鮎川鯨まつりにも、似たような構図をみることができる。このイベントは、正式には捕鯨会社によってではなく、捕鯨者と非捕鯨者を同様に組み込んだ地元の団体によって組織された。これは鮎川捕鯨のような小さな会社に限ったものではなく、町全体が、捕鯨経験がずっと長い西日本の捕鯨の町と鮎川が、同等になったことを日本全体に知らしめることで、鯨の町の発展を願ったのである。西日本の捕鯨文化を引き継ぐことはこの点を証明する一助となり、そして全国的な捕鯨文化を創造するのに不可欠だったのである。

まとめ

この小論で、筆者は鮎川の牡鹿鯨まつりが西日本の捕鯨文化、とりわけ一七世紀まで遡ることができる仏教的な鯨供養を模倣して形作られていったことを紹介した。死んだクジラの靈魂が、儀礼を通じて鎮められなければならない餓鬼として存在するという思考は、クジラを幸運をもたらすものとす



写真6 鮎川捕鯨株式会社が1933（昭和8）年に建立した鯨供養碑



写真7 現在の牡鹿鯨まつりで披露される子ども七福神舞

るそれまで三陸沿岸とは大きく異なるものであった。

しかし筆者は、それを行ったのが西日本の捕鯨者ではなく、鮎川の地域住民であり、他の捕鯨の町と同等にみられるようになるために、町の民俗に鯨供養を取り込んでいったことについて論じた。そうしたなか、初期の鮎川鯨まつりにおいて豊漁を願うための大漁唄い込みと町の発展を願う鮎川音頭が催されたのは、かつての三陸におけるクジラをエビスとみる文化の最後の名残のひとつだといえるのではないだろうか。

註

- 1 「鯨の港、宮城県鮎川港では、同港が捕鯨基地となってから今年で水揚げ頭数が四万を突破したので、鯨供養のため二十二日から四日間鯨まつりを催す。」『河北新報』昭和二八年八月八日、五頁
- 2 牡鹿町史編纂委員会編『牡鹿町誌 上巻』牡鹿町、一九八八年、一八五頁
- 3 梶野 一九五五、一〇八～一〇九頁
- 4 梶野 一九五五、一二〇～一二一頁
- 5 Ito 2018、四七～五〇頁参照
- 6 山下 一九九七参照
- 7 Ito 2018、Kato 2007 参照
- 8 Itoh 2018、吉原 一九九七、酒井 二〇〇四、一三九～一四〇頁
- 9 例えば牡鹿町誌編さん委員会 二〇〇二年、五三八～五四二頁

参考文献

- Itoh, Mayumi 2018 *The Japanese Culture of Mourning Whales*. Singapore : Palgrave Macmillan.
- 梶野恵三 『海の野獣』 春陽堂書店、一九五五年
- Kato, Kumi 2007 *Prayers for the Whales : Spirituality and Ethics of a Former Whaling Community — Intangible Cultural Heritage for Sustainability*. International Journal of Cultural Property 14(03) : 283-313.
- 牡鹿町誌編さん委員会 『牡鹿町誌 上巻』 牡鹿町、一九八八年
- 牡鹿町誌編さん委員会 『牡鹿町誌 下巻』 牡鹿町、二〇〇二年
- 酒井久男 『図説久慈・二戸・九戸の歴史』 郷土出版社、二〇〇四年
- 吉原友吉 「鯨の墓」 谷川健一編『日本民俗文化資料集成 第18巻 鯨・イルカの民俗』 三一書房、一九九七年、四〇九～四七八頁